


出典: フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』



この記事は検証可能な参考文献や出典が全く示されていないか、不十分です。

出典を追加して記事の信頼性向上にご協力ください。(2019年5月)

イヌ（犬、狗、学名:*Canis lupus familiaris*、ラテン語名:canis、英語名〔国際通用名〕:dog、domestic dog）は、ネコ目（食肉目）- イヌ科- イヌ属に分類される哺乳類の一種である。

目次

概要

分類

シノニム

分布

生態的・形態的特徴

骨格

犬の毛

歯

消化器

腺

嗅覚

聴覚

視覚

味覚・舌

呼吸

出産と成長

寿命

社会性

知能

イヌの起源

イヌと歴史・文化

世界におけるイヌの歴史

イヌの文化的印象

日本におけるイヌの歴史

先史時代のイヌ

古代のイヌ

中世のイヌ

近世のイヌ

近現代のイヌ

日本犬

人間社会との関わり

イヌの飼育・管理

人気の犬種

イヌ
<div>生息年代: 更新世-現世, 0.015–0 Ma</div> <div> <div>PreЄ</div> <div>Є</div> <div>O</div> <div>S</div> <div>D</div> <div>C</div> <div>P</div> <div>T</div> <div>J</div> <div>K</div> <div>Pg</div> <div>N</div> </div>
 <div>シベリアン・ハスキー cf.その他の犬種一覧</div>
保全状況評価
<div>愛玩動物</div> <div>Domesticated</div>
地質時代
<div>1万5,000年以上前^{[注釈 1]}、現世</div> <div>（新生代第四紀更新世末期タランチアン^{[en]}- 完新世サブアトランティック^{[ja]}）</div>
分類
<div>ドメ</div> <div>イン</div> <div>真核生物 Eukaryota</div> <div> ^{[注釈 2]}</div>
<div>上界 : オピストコンタ Opisthokonta</div>
<div>階級なし : ホロゾア Holozoa</div>
<div>界 : 動物界 Animalia</div>
<div>階級なし : （未整理^{[注釈 3]}）</div>
<div>亜界 : 真正後生動物 Eumetazoa</div>
<div>階級なし : （未整理）左右相称動物 Bilateria</div>
<div>上門 : 新口動物上門 Deuterostomia</div>
<div>門 : 脊索動物門 Chordata</div>
<div>亜門 : 脊椎動物亜門 Vertebrata</div>
<div>上綱 : 顎口上綱 Gnathostomata</div>
<div>（未整理）四肢動物上綱</div> <div>階級なし : Tetrapoda ^{[注釈 4]}</div>
<div>階級なし : （未整理）爬形類 Reptiliomorpha</div>
<div>階級なし : （未整理）有羊膜類 Amniota</div>
<div>階級なし : （未整理）単弓類 Synapsida</div>
<div>階級なし : （未整理）獣弓類 Therapsida</div>
<div>（未整理）哺乳形</div> <div>階級なし : 類Mammaliaformes</div>
<div>綱 : 哺乳綱 Mammalia</div>
<div>亜綱 : 獣亜綱 Theria</div>
<div>下綱 : 真獣下綱 Eutheria</div>
<div>（未整理）</div> <div>階級なし : 北方真獣類 Boreoeutheria</div>
<div>上目 : ローラシア獣上目 Laurasiatheria</div>
<div>（未整理）ペガサス野獣類</div> <div>階級なし : Pegasoferae</div>

飼育・管理
イヌに悪影響を与える食べ物
ブリーダー
イヌをめぐる社会問題
犬の鳴き声のオノマトペ
日本語
日本語以外
犬を主題とした作品・キャラクターなど
歴史に名を残した犬
名前にイヌを持つ生物
犬の登場する諺・故事成語
その他イヌについて

脚注
 注釈
 出典
参考文献
関連項目

概要

属名 *Canis*、種小名 *lupus* はラテン語でそれぞれ「犬」「狼」の意。亜種名 *familiaris* はやはりラテン語で、「家庭に属する」といった意味。また、英語: familiar、フランス語: familier など「慣れ親しんだ」を意味する現代語の語源でもある。

犬の分類学上の位置づけ

古く日本では**ヤマイヌ**(狼)に対して「**イエイヌ**」とも言っていた。英語名 *domestic dog* は、伝統的な学名 *C. familiaris*(家族の-犬)を英訳にしたもので、日本では *domestic dog* の訳語として古来からのイエイヌの語をあてるようになった。

犬の分類学上の位置づけ

また、広義の「イヌ」は広くイヌ科に属する動物(イエイヌ、オオカミ、コヨーテ、ジャッカル、キツネ、タヌキ、ヤブイヌ、リカオンなど)の総称でもあるが、日本ではこちらの用法はあまり一般的ではなく、欧文翻訳の際、イヌ科動物を表す **dogs** や **canine** の訳語として当てられるときも「イヌ類」などとしてイエイヌと区別するのが普通である。以下では狭義のイヌ(ヤマイヌなどを除くイエイヌ)についてのみ解説する。

犬の分類学上の位置づけ

イエイヌは人間の手によって作り出された動物群である。最も古くに家畜化されたと考えられる動物であり、現代でも、ネコ *Felis silvestris catus* と並んで代表的なペットまたはコンパニオンアニマルとして、広く飼育され、親しまれている。

犬の分類学上の位置づけ

野生化したものを野犬といい、日本語ではあたかも標準和名であるかのように片仮名で「ノイヌ」と表記されることも多いが、野犬(やけん)を誤って訓読したため生じた新語であり、分類学上は種や亜種としてイエイヌと区別される存在ではない。

犬の分類学上の位置づけ

現在、ジャパンケネルクラブ(JKC)では、国際畜犬連盟(FCI)が公認する331犬種を公認し、そのうち176犬種を登録してスタンダードを定めている。 なお、非公認犬種を含めると約700 - 800の犬種がいとされている。

犬の分類学上の位置づけ

また、世界全体では4億匹の犬がいてと見積もられている。血液型は8種類。

犬の分類学上の位置づけ

犬種については「**犬の品種一覧**」を参照

分類

犬の分類学上の位置づけ

シノニム

Canis lupus familiaris のシノニム(異名)を示す。なかでも太字は有力説に基づくものである。

犬の分類学上の位置づけ

- Canis aegyptius*　■ *Canis familiarus aegyptius*　■ *Canis familiarus molossus*　■ *Canis molossus*
- *Canis canis*　■ ***Canis familiarus domesticus***　■ *Canis familiaris saultor*　■ *Canis saultor*
- ***Canis familiaris***　■ *Canis familiarus melitaeus*　■ *Canis melitaeus*

分布

階級なし：(未整理)友獣類 Zooamata
階級なし：(未整理)野獣類 Ferae
 (未整理)食肉形類
階級なし： <div></div> Carnivoramorpha
 目：ネコ目(食肉目) Carnivora
 亜目：イヌ亜目 Fissipedia
 下目：イヌ下目 Cynoidea
 科：イヌ科 Canidae
 亜科：イヌ亜科 Caninae
階級なし：(補足階級)イヌ族 Canini ^{[1]}
 属：イヌ属 <i>Canis</i>
 種：タイリクオオカミ <i>C. lupus</i>
 亜種： イエイヌ <i>C. l. familiaris</i>
学名
<i>Canis lupus familiaris</i> <div>(Linnaeus, 1758)</div>
シノニム
本文を参照
和名
イエイヌ
英名
Dog, Domestic dog



犬の品種と形態学

イヌの染色体は78本(2n)あり、これは38対の常染色体と1対の性染色体からなる。これは同じイヌ属のドール、リカオン、ジャッカル類、コヨーテ類などとも共通である。これらの種は交配可能であり、この雑種は生殖能力をもつ。ただし、これらは行動学的に生殖前隔離が起こり、また、地理的にも隔離されている。ジャッカル類は主にアフリカに、(アジアに分布の及ぶキンイロジャッカルはジャッカル類では無くオオカミに近縁だとされる)、コヨーテ類は北アメリカ大陸に分布する。

また、オーストラリア大陸と周辺地域に生息するディンゴと、ニューギニア島に生息するニューギニアン・シンギング・ドッグは、人類によって約4,000年前に持ち込まれたイヌであり、かつては別種とされていたが、現在はイエイヌとともに、タイリクオオカミの1亜種とされている。

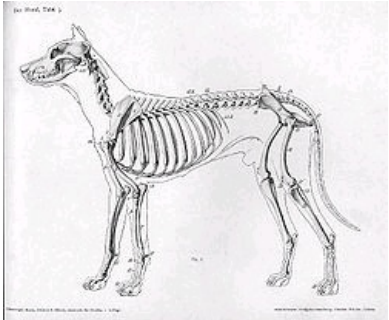
生態的・形態的特徴

イヌの属するイヌ科は、森林から開けた草原へと生活の場を移して追跡型の狩猟者となった食肉類のグループである。待ち伏せ・忍び寄り型の狩りに適応したネコ科の動物に対して、イヌ科の動物は、細長い四肢など、持久力重視の走行に適した体のつくりをしている。

また、イヌは古くから品種改良が繰り返されて、人工的に改良された品種には、自然界では極めて珍しい難産になるものも多く、品種によっては、出産時に帝王切開が必要不可欠となる(主にブルドッグ)。

骨格

イヌの歩き方は、指で体を支える趾行(しこう)性で、肉球(4つの指球(趾球)と1つの掌球(蹠球))と爪が地面につく。爪は先が尖っており、走るときにスパイクのような役割をする。ただし、ネコ科のものほど鋭くはない。爪を狩りの道具とするものが多いネコ類とは異なり、イヌ科の動物は爪を引っ込めることができず、各指はほとんど広げることができない。ネコ類と同じく、第3指(ヒトでいう中指)と第4指(薬指)の長さが同じである。後肢の第1趾は退化して4本趾の構造となっているが、たまに後肢が5本趾のイヌもいる(こうしたイヌの後肢の第1趾は「狼爪」と称する)。前肢は5本指の構造となっているが、やはり、その第1指(親指)も地面には着かない。一部のマウンテンドッグは狼爪が2本あるものもある。狼爪は幼少時に切除される場合が多いが、前述のマウンテンドッグの場合には切除しない。



イヌの骨格

前肢はほとんど前後にしか動かず、鎖骨は失われている。逆に股関節は、靱帯による制約が少ないために、他の家畜類に比べて可動性が広く、後肢を頭を搔くのに用いたりし、また、雄は排尿時に高く持ち上げるが、陰茎の位置からして大型犬のほうが有利ではある(雌はしゃがんで少し上げる)。反面、靱帯が少ないことは、しばしば股関節脱臼を起こす原因ともなっており、高齢犬・著しく体重が増えた犬・大型犬でその傾向が高い。

肋骨は13対で、ヒトより1対多く、走るのに必要な肺と心臓は、体のわりに大きい。心臓はネコ目(食肉目)の他のグループの動物と違って球形に近く、特に左心室が非常に大きい。

尾は走行中の方向転換で舵として働くが、オオカミなどと比べると細く短くなっており、また、日本犬に多く見られるように巻き上がっているものがあるのは、筋肉の一部が退化して弱くなっているためである。

陰茎に陰茎骨を具えていることも特徴である。



狼爪の例



柴犬の後肢

犬の毛

犬の毛の生え方や長さには、犬種によって様々な特徴がある。犬の毛の成長サイクルは、犬種や生活環境によって大きく変化する。

歯

歯式は 3/3・1/1・4/4・2/3=42 で歯は42本(21対)あり、32本(16対)の歯をもつヒトや、28- 30本のネコと比べると、顎が長い分、歯の数も多い。ヒトと比較すると、切歯が上下各3本、前臼歯(小臼歯)が各4本と多く、後臼歯(大臼歯)は上顎で2本(下顎は3本)と少ない。イヌ亜目に共通の身体的特徴として、犬歯(牙)のほかに、裂肉歯と呼ばれる山型にとがった大きな臼歯が発達している。この歯は鋏(はさみ)のようにして肉を切る働きをもつ。裂肉歯は、上顎の第4前臼歯と、下顎の第1大臼歯である。食物はあまり咀嚼せずに呑み込んでしまう。



犬の毛

消化器

イヌ科グループの他の動物と同様、イヌは基本的には肉食であるが、植物質を含むさまざまな食物にも、ある程度までは適応する。消化管はそれほど長くないが、腸の長さが体長(頭胴長)の4から4.5倍程度であるオオカミに対して、イヌのほうは5から7倍と、いくらか長くなっており、これも植物質の消化に役立っている。肉食獣の中には盲腸をもたない種も存在するが、イヌはそれほど大きくないものの 5から20cm程度の盲腸をもつ。

オオカミとイヌの違いとして、脳機能に関する遺伝子および消化酵素をコードする遺伝子の相違が報告されている^[2]。報告によれば、イヌではデンプンの分解酵素の一つであるアミラーゼ遺伝子のコピー数が多く、その活性はオオカミの28倍である。同じくデンプンの分解酵素であるマルターゼ遺伝子の場合、コピー数に大きな違いは無いが、イヌのマルターゼ遺伝子配列は長いタイプであり草食動物のものに近いという。このような違いはイヌの進化における家畜化・雑食化の過程の一つと考えられている。

犬は水を飲む時、舌の裏で水をすくって飲む^{[3][4][5]}。

腺

イヌの耳下腺は、副交感神経性の強い刺激を受けると、ヒトの耳下腺の約10倍のスピードで唾液を分泌する。唾液は浅速呼吸(喘ぎ)により、口の粘膜と舌の表面から蒸散する。激しい運動のあと、イヌが口を開け、舌を垂らしてさかんに喘いでいるのはこのためである。イヌの体には汗腺が少ないが、この体温調節法は汗の蒸発による方法と同じくらい効果的であるという。

肛門には肛門囊(こうもんのう)と呼ばれる一対の分泌腺があり、縄張りのマーキングに使われるにおいの強い分泌液はここから出ている。ジャコウネコやハイエナのように外に直接開いてはおらず、細い導管で肛門付近に開口している。なお、イヌが雨に濡れたときなどに特に匂う独特の体臭は、主に全身の皮脂腺の分泌物によるものである。

嗅覚

警察犬の遺留品捜査や災害救助犬の被災者探索等でよく知られるように、イヌの感覚のうち最も発達しているのは嗅覚であり、において食べられるものかどうか、目の前にいる動物は敵か味方かなどを判断する。また、コミュニケーションの手段としても、ここはどのイヌの縄張りなのかや、相手の犬の尻のにおいを嗅ぐことで相手は雄か雌かなどを判断することでも嗅覚は用いられたりする。そのため、イヌにとっては嗅覚はなくてはならない存在である。

イヌの嗅覚はヒトの数千から数万倍とされるが、その能力は有香物質の種類によっても大きく異なり、酢酸の匂いなどはヒトの1億倍まで感知できる。嗅覚は鼻腔の嗅上皮にある嗅覚受容神経(嗅覚細胞)によって感受されるが、ヒトの嗅上皮が3から4cm²なのに対し、イヌの嗅上皮は18から150cm²ある。嗅上皮の粘膜を覆う粘液層中に分布する、「嗅毛」と呼ばれる線毛は、においを感覚受容器に導く働きをするが、イヌの嗅毛は他の動物のそれより本数が多く、長い。嗅細胞の層も、ヒトでは1層であるのに対して、イヌでは数層になっており、ヒトの500万個に対し、2億5千万から30億個あると推定されている。鼻腔の血管系もよく発達している。ヒトが顔や声について特別な記憶力をもつように、イヌは匂いについての優れた記憶力をもっている。イヌを含む動物群の鼻先のいつも湿っている無毛の部分を「鼻鏡」と呼ぶが、これもイヌのすぐれた嗅覚を保つのと同時に風の向きを探る働きをすると考えられる。

上述のようにイヌが嗅覚に優れた動物であることは事実であるが、ただし、他のさまざまな動物に比してイヌの嗅覚だけが特別に秀でているということではない。イヌ同様に探索目的での使役が多いブタ(イノシシ類)も引けを取らないと考えられているし、クマの研究者によればクマ類の嗅覚はイヌ(イエヌ)の約7倍とされている。ゾウは嗅覚細胞の総量から言っても、能力においてイヌやクマを遥かに上回る動物として知られている。なお、魚類ではウナギの嗅覚がイヌの嗅覚に匹敵するとされる^[6]。

聴覚

イヌは聴覚も比較的鋭い。また可聴周波数は40から47,000Hzと、ヒトの20から20,000Hzに比べて高音域で広い。超音波を発する笛である犬笛(約30,000Hz)はこの性質を利用したもの。聴力において、犬種による違いはほとんど見られない。

視覚

優れた動体視力を持っており、1秒間に30フレームを表示するテレビ画像などはコマ送りにしか見えない。一方、イヌの眼には赤色に反応する錐体細胞の数が非常に少ないといわれ、明るいときには赤色はほとんど見えていない可能性が高い。色の明暗は認識できるが、全色盲に近いと考えられている。信号機だけは識別できるとされていたが、実はこれも灯火の点灯順序と人間の動きを関連づけて学習していたに過ぎない事が確認されている。ネコやキツネの瞳孔が縦長であるのに対し、イヌの瞳孔は収縮しても丸いままである。

味覚・舌

同じ食肉目のイエネコと違い砂糖などの「甘味」を感じることが出来る。サツマイモなどの甘味のあるものを好むとされる。酸味にも敏感でこちらは一般的に好まない。一方で塩味には鈍感でほとんど感じ取れていないとされる。また「アミノ酸の甘さ」を感じ取れるため肉やチーズといった動物性のタンパク質を好む。味蕾はヒトの約1万個に対しイヌは2000個程度とされヒトほど味覚は区別出来ないとされる。

ネコと比較すると雑食性が強く、肉以外にも野菜や果物、穀物や人用のお菓子も食する。人との共存の歴史においてこれらの強い雑食性を身に着けたと考えられるが、犬の害になる食物も誤食するケースがあり注意が必要になってくる。

呼吸

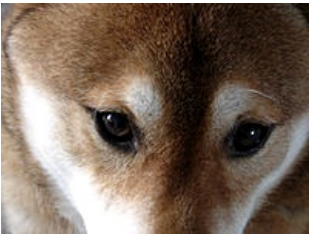
イヌの呼吸は「パンティング《panting》(浅速呼吸)」と呼ばれ、俗に「喘ぎ呼吸」とも呼ばれる。イヌは足の裏の肉球以外には汗腺を持たない動物であり、肉球からの発汗による体温調節の効率は人間の130分の1程度しかなく、ヒトとは異なり発汗で体温調節を図ることが出来ない。その為、熱の発散の唯一の手段は口からの呼吸しかなく、汗をかく代わりに舌を出しハアハアと喘ぐように呼吸することで、そこから染み出す唾液を始め口内や喉の水



豚足を食べるゴールデン・レトリバー



柴犬の鼻づら



犬の眼球

分を蒸発させて熱を放出し体温調節を図っている。汗腺が身体のごく一部にしかないイヌにとっては、その呼吸や行為自体がヒトを含む他の動物以上に命に関わる重要な行動となる^{[注釈 5][7]}。なお、パンティングの頻度は大型犬に多いことが判明している。

出産と成長

メスの発情周期は6から8か月であるが、犬種により差がある。発情期間は約3か月で、この期間のうち前期1か月の間が実際に交尾により繁殖が行える可能性のある期間である。発情期に入ると、メスは性器を自ら舐める仕草が多くなり始める。この時期からメスは性器からフェロモンを発して周囲のオスに発情期を察知させるようになっている為、他のオスを興奮させない意味でも、ドッグランなど不特定多数のイヌがいる場所に発情期に入ったメスを連れ出す事は控える事が望ましい。次いで性器が充血して出血(生理)が始まる時期に移行する。この期間は概ね10日前後で、この時期にパートナーとなるオスと同居させる事で交配が行われる^[8]。

交尾の際にはほかの多くのイヌ科の動物と同様に交尾結合が見られ、後背位で結合した後にオスがメスの尻を跨いで反対向きとなり、尻同士を向かい合わせた状態で長い時は30分以上交尾が継続する。交尾中はオスの陰茎は根元付近が特に大きく肥大してメスの膣から抜けなくなる為、射精が終了するまでは人の手でも引き離すことは難しい^[8]。ブリーダーによる血統証明書の申請の際には、この「尻を向かい合わせた姿勢」の写真を根拠として**交配証明書**を作成することが一般的である^[9]。

排卵期が過ぎた後の残りの2か月余りは、メスの体内では黄体ホルモンが分泌されており、妊娠の有無に関わらず乳房の肥大や母乳の分泌、地面に穴を掘る営巣行動などが見られる場合がある。こうした状況は**偽妊娠**(想像妊娠)と呼ばれ、この期間が後述の実際の妊娠期間とほぼ重なる為、妊娠の真偽判定が難しくなる場合がある^[8]。その一方で、偽妊娠期間中で母乳が出るメスは他の子犬へ授乳する乳母の役目を果たせるため、ネグレクトなどの何らかの理由で子犬への生母からの授乳が期待できない場合に、こうしたメスに授乳を行わせる場合もある^[10]。同種族のみならず、ネコ科の動物など全く異なる種族の授乳や育児を行なった事例もある^{[11][12]}。交配が成立した場合の妊娠期間は50から70日。3から12子を一度に出産するため、乳房を左右に5対持っているのが一般的である。生誕6から12か月目で成犬の大きさになり、その後、2から3か月目で性熟する。これはオオカミの2年に比べて早熟である。小型犬は成犬に達するのが早い分、性熟も早い。

寿命

詳細は「**高齢犬の一覧**」を参照

イヌは10歳になると老犬の域になり12歳から20歳程度まで生きる。ただし犬種や生育環境によっても異なり、基本的に大型犬のほうが小型犬よりも短命である。また、一般的には屋外飼育よりも室内犬のほうが長命の傾向があり、純血種よりも雑種のほうが長命と言われる。歳を取るスピードは若いほど早く成犬となつてからは緩やかになる。イヌの年齢をヒトの年齢に換算する方法は諸説あるが、科学的根拠に基づいたものではなく必ずしも正確ではない。目安として、小型犬は生後1年でヒトの約17歳、生後2年で約24歳、大型犬は生後2年で約20歳、それ以降は小型犬で1年につきヒトの4歳程度分、大型犬は5から6歳程度分、歳を取ると考えられる。転じて、ITが普及した2000年前後には、ITの進化の目まぐるしさをイヌの1年がヒトの人生の数年分であることにたとえて「**ドッグイヤー**」という比喩が使われた^[13]。

飼育環境の改善やフィラリア予防等の動物医療の普及などによって、犬の平均寿命は伸びる傾向にある。

かつてギネスブックにて、2010年10月から2011年12月に掛けて「生存する世界最高齢のイヌ」と認定されていた栃木県在住の雑種犬ブースケは^[14]、2011年12月5日の死没時点で26歳9ヶ月^[15]であり、人間の年齢で換算すると125歳以上と推定された。記録が残っている最も長く生きた犬はオーストラリアの牧畜犬ブルーイで、29歳5ヶ月7日。

社会性

イヌの特徴としてヒトと同じく社会性を持つ生き物であることが挙げられる。意思疎通をするための感情や表情も豊かで、褒める、認める、命令するなどの概念を持っている。ヒトに飼われているイヌは、人間の家族と自身を1つの群れの構成員と見なしていると考えられ、群れの中の上位者によく従い、その命令に忠実な行動を取る。この習性のおかげでイヌは訓練が容易で、古くからヒトに飼われてきた。最古の家畜とする説が有力である。子犬を入手して飼う場合には、親犬の元での犬社会に対する社会化教育と新しい飼い主と家庭および周囲環境への馴化(じゅんか)との兼ね合いから、ほぼ6週齢から7週齢で親元より直接譲り受けるのが理想的とされる。

知能

全般的に高い知能を有する。また、品種によってはより優れた学習能力を示す。総じて記憶力も高く、例えば狂犬病の予防接種を受けた犬は次年度の狂犬病予防接種に行く際、パニックを起こす事がある。試行錯誤を行う事もあり、例えば脱走するために首輪のフックを地面にこすりつけてフックが外れないかどうか試行したり、室内で粗相をしたときは何か他のものをのせて大便を隠し、とぼけるなどの行動を行う事もある。他の犬に対して関心を示し、威嚇する行動を取る品種とそうでないものがある。他の犬への関心の示し方、攻撃性は、躰(しつけ)によっても抑えることができる程度可能である。なお、犬自体の「人間に対しての関心の示し方や接し方」は現時点において未知のものが多く、その解明の為の研究が今も進められているが、近年の研究では飼い主側の人間が示す「声を荒げて叱る」などの態度に対して敏感な反応を示すことが明らかになっている^[16]。一方で、ある調査結果からは「人間の恐怖心」の有無を感じ取れる知性を持つことが判明しており、この内容は「**Journal of Epidemiology and Community Health**」(2月1日付オンライン版)にて掲載されている^[17]。

イヌの起源



交尾を開始した犬



妊娠した犬



犬の授乳



尻を嗅ぐことでイヌは互いの強弱が分かるという

詳細は「イヌの起源」を参照

イヌは最も古くに家畜化された動物であり、手に仔犬（イヌかオオカミかはっきりしない）を持たせて埋葬された1万2千年ほど前の狩猟採集民の遺体がイスラエルで発見されている。分子系統学的研究では1万5千年以上前にオオカミから分化したと推定されている。イヌの野生原種はタイリクオオカミ（*Canis lupus*）の亜種のいずれかと考えられている。イヌのDNAの組成は、オオカミとほとんど変わらない。イヌがオオカミと分岐してからの1万5千年という期間は種分化としては短く、イヌを独立種とするかオオカミの亜種とするかで議論が分かれているが、交雑可能な点などから亜種とする意見が優勢となりつつある。本項の分類もそれに従っている。イヌとオオカミの交雑に関しては、別項「狼犬（ハイブリッドウルフ）」も参照のこと。

イヌと歴史・文化

世界におけるイヌの歴史

「犬食文化」も参照

人間と暮らし始めた最も古い動物であるイヌは、民族文化や表現の中に登場することが多い。

古代メソポタミアや古代ギリシアでは彫刻や壺に飼いイヌが描かれており、古代エジプトでは犬は死を司る存在とされ（→アヌビス神）、飼い犬が死ぬと埋葬されていた。紀元前2000年頃の古代メソポタミアの説話『エンメルカルとアラッタ市の領主』では、アラッタ領主が「黒でなく、白でなく、赤でなく、黄でなく、斑でもない犬を探せ」と難題を命じる場面がある。つまり、既にこれらの毛並みの犬が一般的だったわけである。紀元前に中東に広まったゾロアスター教でも犬は神聖とみなされるが、ユダヤ教では犬の地位が下り、聖書にも18回登場するが、ここでもブタとともに不浄の動物とされている。イスラム教では邪悪な生き物とされるようになった。現在でもイスラム圏では牧羊犬以外にイヌが飼われることは少ないが、欧米諸国では多くの犬が家族同然に人々に飼われている。日本でも5世帯に1世帯がイヌを飼っているといわれている。中世ヨーロッパの時代には、宗教的迷信により、魔女の手先（使い魔）として忌み嫌われ虐待・虐殺されたネコに対し、犬は邪悪なものから人々を守るとされ、待遇は良かった。



古代エジプトの壁画に描かれたイヌ（紀元前2300年頃）

古代中国では境界を守るための生贄など、呪術や儀式にも利用されていた。知られる限り最古の漢字である甲骨文字には「犬」が「𠂔」と表記され、「けものへん（犬部）」を含む「犬」を部首とする漢字の成り立ちからも、しばしばそのことが窺われる。古来、人間の感じることのできない超自然的な存在によく感応する神秘的な動物ともされ、死と結びつけられることも少なくなかった（地獄の番犬「ケルベロス」など）。漢字の成り立ちとして、「犬」の「犭」は、耳を意味している。

中央アジアの遊牧民の間では、家畜の見張りや誘導を行うのに欠かせない犬は、大切にされた。モンゴル帝国のチンギス・カンに仕えた側近中の側近たちは、四駿四狗（4頭の駿馬と4頭の犬）と呼ばれ讃えられた。

ヨーロッパ人に「発見」される前のアメリカ大陸では、犬は唯一とも言える家畜であり、非常に重要な存在であった。人間にとつてなくてはならない労働力であり、狩猟、番犬、犬ぞり、祭りでの生贄やご馳走として様々に利用された。ユイビの儀式など、祭りにおいて犬の肉は重要な存在である。また、白人によって弾圧されたインディアン諸部族の中で、シャイアン族の徹底抗戦を選んだ者たちは、Hotamétaneo'o（ドッグ・ソルジャー、犬の戦士団）という組織を作り、白人たちと戦った。

欧米諸国では、古代から狩猟の盛んな文化圏のため、猟犬としての犬との共存に長い歴史がある。今日では特に英国と米国、ドイツなどに愛犬家が多い。英国には「子供が生まれたら犬を飼いなさい。子供が赤ん坊の時、子供の良き守り手となるでしょう。子供が幼年期の時、子供の良き遊び相手となるでしょう。子供が少年期の時、子供の良き理解者となるでしょう。そして子供が青年になった時、自らの死をもって子供に命の尊さを教えるでしょう。」という諺がある。世界で最古の1873年に設立された愛犬家団体である英国のケンネルクラブと1884年に設立された米国のアメリカンケンネルクラブがそれを物語っている。ヨーロッパ諸国の王家や貴族の間では、古来、伝統的に愛玩用・護衛用・狩猟用などとして飼われている。特にイングランド王のチャールズ2世およびエドワード7世は愛犬家として有名である。英国の女王ヴィクトリアはコリーなどの犬を多数飼っていた。現在の英国女王エリザベス2世も愛犬家で知られている。英国王室は今でも犬舎を所有して飼育と繁殖を行っている。プロイセン（ドイツ）のフリードリヒ大王は常に身邊に数匹のイタリアン・グレイハウンドを侍らせていた。大王はポツダムにある墓所に愛犬達とともに葬られた。政治家では歴代のアメリカ合衆国大統領に愛犬家が多い。特にクーリッジ大統領とフランクリン・ルーズベルト大統領は愛犬家として有名である。近年ではジョージ・W・ブッシュ元大統領も愛犬家。



フランスパリ市内の犬肉店（1910年）^[18]

一方、19世紀後半のイギリスでは狂犬病の原因を巡って大きな論争が起きた。狂犬病はイヌに噛まれることによる感染症であるという主張が流布し、不潔な下層階級の飼う犬、気性の荒い狩猟犬が特に疑いの目を向けられた。人々のヒステリックな対応により、何万匹ともいわれるイヌが狂犬病予防の名目で殺されたが、歴史家のハリエット・リトヴォによれば、19世紀に殺されたイヌのうち、精神に異常をきたしていたイヌは5パーセントに過ぎず、そのうちの四分の三はてんかんか風変わりな外見だったという^[19]。

イヌの文化的印象

犬は欧米や日本など世界の広い地域で一般的に親しまれている。一方で、犬を忌み嫌ったり、虐げたりする文化圏や民族もある。サウジアラビアでは一般に嫌悪の対象である^[20]。コンゴのムプティ族は、犬を狩りに必要な「貴重な財産」と見なしつつも忌み嫌っており、彼らの犬は馬鹿にされ殴る蹴るなどされる^[20]。欧米では犬をペット・家族の一員と考えるため犬肉食はタブー視されるが、インドや中東で犬肉を食べる習慣がないのは、古代ヒンドゥー教やイスラム教では犬を卑しく汚らしい害獣と見なししているため犬肉食をタブー視していると考えられる^[21]。

イランでは犬をペットとして愛玩する人が増えているのに対して、イスラム保守派が「西洋化の象徴」と批判している^[22]。

犬は一般に出産が軽い（安産）とされることから、日本ではこれにあやかって戌の日に安産を願い、犬張子や帯祝いの習慣が始まるようになる。

「人間の最良の友 (Man's best friend)」と言われるように、飼い主やその家族に忠実なところはプラスイメージが強い。近代日本では忠犬ハチ公の逸話が多く国民に愛されたほか、江戸時代以前にも主人の危機を救おうとした伝説・民話も多い(秋田県大館市の老犬神社など)。他方、東西の諺や、日本語にある「犬死に」「犬侍」「犬じもの」「負け犬」といったネガティブ成語・熟語に使われることも多い。また、忠実さを逆手にとって、権力や体制側に順従に従っている人物や特定の事物(思想や団体・有名人など)を盲目的に支持・信奉する人物やスパイの意味でも「犬」が用いられる。また「雌犬」は女性への侮辱語として使われる。植物の和名では、イヌタデ、イヌビエ(en)など、本来その名をもつ有用な植物と似て非なるものを指すのにしばしば用いられる。

フィクションにおいて、戦いを求めてやまないキャラクターに対する綽名としてよく使われる「狂犬」は、畏怖と侮蔑の両方を孕んだ表現である。

日本におけるイヌの歴史

先史時代のイヌ

日本列島においては犬の起源は不明であるが、家畜化された犬を飼う習慣が日本列島に渡ってきたと考えられている。縄文時代早期からの遺跡から犬(縄文犬)が出土している。その一部は埋葬された状態だが、多数例は散乱状態で出ており、家族の一員として飼われた犬と、そうでない犬がいたと考えられる^[23]。縄文早期から中期には体高45センチメートル前後の中型犬、縄文後期には体高40センチメートル前後の小型犬に変化し、これは日本列島で長く飼育されたことによる島嶼化現象と考えられている^[24]。

なお、1990年代に縄文人と犬との関係の定説に再考を迫る発見があった。霞ヶ浦沿岸の茨城県麻生町(現:行方市)で発掘調査された縄文中期から後期の於下貝塚から、犬の各部位の骨が散乱した状態で出土。犬の上腕骨1点に、解体痕の可能性が高い切痕が確認された。調査報告では、犬を食用として解体していた物的証拠と評価しており、日本列島における犬食の起源がさらに遡る可能性が高い^{[25][26]}。

弥生時代に犬の埋葬例は激減する^[23]。また、墓に供えられた壺の中に、犬の骨の一部が入っていることがあり、犬が人間の墓の供え物になったことがわかる^[27]。長崎県原の辻遺跡などでは、解体された痕のある犬の骨が発見され、食用に饗されたことも窺える。遺跡からは縄文犬と形質の異なる犬も出土しており、大陸から連れてこられたと考えられる。

古代のイヌ

『日本書紀』には日本武尊が神坂峠を超えようとしたときに、悪神の使いの白鹿を殺して道に迷い、窮地に陥ったところ、一匹の狗(犬)が姿を現し、尊らを導いて窮地から脱出させたとの記述がある。そして、『日本書紀』には天武天皇5年4月17日(675年)の条に、4月1日から9月30日の期間、牛・馬・犬・猿・鶏の、いわゆる肉食禁止令を出しており、犬を食べる人がいたことは明らかである。なお、長屋王邸跡から出土した木簡の中に子を産んだ母犬の餌に米(呪術的な力の源とされた)を支給すると記されたものが含まれていたことから、長屋王邸では、貴重な米を犬の餌にしていたらしいが、奈良文化財研究所の金子裕之は、「この米は犬を太らせて食べるためのもので、客をもてなすための食用犬だった」との説を発表した。

奈良時代・平安時代には貴族が鷹狩や守衛に使う犬を飼育する職として犬養部(犬飼部)が存在した。

平安京では、犬が人間の残飯や排泄物を食べていた。また、埋葬されない人の死体が放置され、犬に食われることが珍しくなかった^[28]。

中世のイヌ

鎌倉時代には武士の弓術修練の一つとして、走り回る犬を臺目矢(ひきめや。丸い緩衝材付きの矢)で射る犬追物や犬を争わせる闘犬が盛んになった。

肉食忌避の観念がある一方で、犬を食べる風習も廃れてはおらず、室町時代の草戸千軒町遺跡からは食用にした跡が残る犬の骨が見つかった^[27]。浄土真宗の宗祖親鸞は『大般涅槃經』を参考に浄肉(食べてもよい肉)・不浄肉(食べてはいけない肉)の区別を行った際、犬肉を猿肉などとともに不浄肉に分類するなど、犬肉食を忌避する考え方も生まれた。

南北朝時代以降には軍用犬として犬を活用する武将も現れ、『太平記』には越前国鷹巣城(現・福井県高須山)攻防戦に於いて、南朝方の守将、畑時能が愛犬「犬獅子」と2人の従者と共に寄せ手の北朝方の砦を攻め落とす逸話が記述されており、江戸時代に歌川国芳が干支の動物と縁の深い歴史上の人物を浮世絵に描いた『武勇見立十二支』にて戌年に畑時能と犬獅子が描かれるなど、人々に広く知られる存在となった^[29]。戦国時代には武蔵国の武将太田資正が、岩槻城と松山城の緊急連絡手段として伝令犬を用い、北条氏康方の包囲を突破して援軍要請に成功し、度々撃退していた逸話が『関八州古戦録』や『甲陽軍鑑』に記述されている。太田資正の伝令犬戦術は「三楽犬の入替え」と呼ばれ、日本における軍用犬運用の最初の例とされている^[30]。日本の中世で犬が軍用に利用されたことを伝える逸話はこれだけのようである。日本では犬を改良して「武力」のひとつとして使うという思想はなかった^[31]。

近世のイヌ

江戸幕府中期、江戸では野犬が多く、赤ん坊が食い殺される事件もあった。5代将軍・徳川綱吉は戌年の戌月の戌の日の生まれであったため、彼によって発布された「生類憐れみの令」(1685- 1709年)において、犬は特に保護(生類憐れみの令は人間を含む全ての生き物に対する愛護法令)され、元禄9年(1696年)には犬を殺した江戸の町人が獄門という処罰まで受けている。綱吉は当時の人々から「犬公方」(いぬくぼう)とあだ名された。徳川綱吉は狆を愛玩したようで、綱吉は二人の大名に狆を飼わせたため、二人は高価な狆を求め百余匹も飼育していた。それらの狆は綱吉の命によって江戸城に納められたが、狆は役人に護送され、立派な乗り物に乗せられて登城したという(『三王外記』)^[32]。この法令が直接適用されたのは幕



ジョヴァンニ・ボルディーニ(en)『レジャース夫人』(1885年)



縄文人と縄文犬の復元模型(国立科学博物館の展示)



犬追物

府直轄領であったが、間接的に適用される諸藩でも将軍の意向に逆らうことはできなかった。綱吉の後を継いだ徳川家宣の治世当初に生類憐れみの令は廃止された。天明の大飢饉により米価が高騰し深刻な米不足が起こった際、江戸北町奉行・曲淵景漸がイヌやネコの肉の価格を示して「米がないならイヌやネコの肉を食え」と発言し町人の怒りを買い、江戸市中で打ちこわしまで引き起こす結果となった。

近現代のイヌ

幕末・明治維新期には開国・文明開化により西洋人が日本へ渡り、西洋の文物ももたらされ洋犬を飼う習慣が流行し、ともに1873年(明治6年)刊行の昇斎一景『開花因循興発鏡』や歌川芳藤『本朝舶来戯道具くらべ』など浮世絵にも洋犬が描かれている^[33]。

日本犬

日本犬とは日本原産の犬種である。日本犬には純粋な血統「和犬」と呼ばれる6犬種や、外来の犬種を日本で交配した犬種がいる。

- 秋田犬
- 甲斐犬
- 紀州犬
- 柴犬
- 四国犬
- 北海道犬



徳川綱吉



柴犬は日本犬

人間社会との関わり

元来は、住居の見張り、次いで狩猟の補佐などのために家畜化されたと考えられるが、現在はほとんどが愛玩用であり、日本ではおよそ5世帯に1世帯がイヌを飼っている。長い年月をかけて交配が試みられ、ダックスフント、トイ・プードル、ブルドッグなど、用途に応じたさまざまな品種が開発されてきた。19世紀に生まれたケネルクラブによって、外形、気質などにより犬種の人為的な選別が進んだが、20世紀以降に生まれた新犬種の多くは、見た目だけのために作られたものが多い。イヌは人間によって最も人為的改良をくわえられた動物であると言える。

「シェイプシフター」(変身動物)と呼ぶ研究者がいるように、小さなチワワから大型のセント・バーナードまで、幅広いサイズと形態をもつ。

イヌは、下記のような形で人間に利用され、あるいは人間と関わってきた。

- ヒツジやウシなど家畜の飼育を助ける(コーギー、ボーダーコリー、ジャーマンシェパードなど)
 - 牧羊犬、牧畜犬
- 愛玩動物(ペット)、コンパニオン・アニマル(伴侶動物)として飼育される
 - 愛玩犬
- TVのCMやドラマなどで活躍する
 - タレント犬、モデル犬
- 人間の住居等を見張り、野獣や不審者の接近・侵入を防ぐ
 - 番犬
- 体の不自由な人を助ける(主にラブラドル・レトリバー、ゴールデン・レトリバーなど)
 - 身体障害者補助犬(身体障害者補助犬法)
 - 盲導犬、聴導犬、介助犬
- 麻薬捜査、犯罪の容疑者追跡など、犯罪捜査を助ける(ジャーマンシェパード、ドーベルマンなど)
 - 警察犬、麻薬探知犬、爆発物探知犬、DVD探知犬
- 犬ぞりや荷物運びの引き手として使われる
 - そり犬、荷運び犬
- 馬車の護衛として馬と共に併走する(グレート・デーン、ダルメシアンなど)
- 食用にされる: 犬食(チャウチャウ、ヌロンイ、フィリピン・エディブル・ドッグなど)
 - 中国、朝鮮半島、スイス、フィリピン、アフリカ、一部の北米原住民など
- 闘犬やドッグレース、曲芸などの娯楽に用いられる



放牧された羊の番をするボーダーコリー
米国ノースカロライナ州はンタースヴィル(en)の、ルーラルヒル農場にて。



アメリカ海兵隊の爆発物探知犬(2012年、アフガニスタン)

- 競走犬、演技犬
- 狩猟の際、獲物の発見、追跡、捕殺、撃ち落とされた獲物の探索などを助ける(セッター、ポインターなど)
 - 猟犬(鳥猟犬、獣猟犬)
- 軍事目的に使われる(ジャーマンシェパード、ドーベルマン、ベルジアン・シェパード・ドッグ・マリノアなど)
 - 軍用犬(自衛隊は警備犬と呼ぶ。航空自衛隊は元々歩哨犬と呼んでいたが改称された。)
 - 対戦車犬(ソビエト軍がナチスドイツ戦車軍の対抗策としたが自軍にも被害を及ぼし失敗)
- 雪山や海、さまざまな被災地などで、遭難者の発見・救助に利用される
 - 災害救助犬 海難救助犬
- 病院、監獄等の各種施設で、患者等の心理面のケアに利用される
 - セラピー犬
- ブタなどと同様、トリュフなどにおいの強い食物の探索を助ける
- 実験動物 系統管理されたビーグルが使われることが多い

イヌの肉は数千年前から食用とされてきた^[34]。アジアでは今も年間1600万匹の犬が消費されており、特に中国ではよく食べられている^[35]。韓国でも伝統的に犬を食べる習慣があり、年間消費量は100万匹^[36]。現在の韓国でもポシントン料理の店は普通に見られる。フィリピンでは1998年にイヌ肉食が禁止されたが今も食べられている^[35]。コンゴ川の流域では、肉を柔らかくするためイヌをじわじわとなぶり殺しにするという話もある^[35]。

食用とされる犬の数字についてアジアにおいて年間3000万という主張もあり(アジア動物親善連盟、2019年)、この場合は中国1500万、韓国700万、ベトナム500万ほかという内訳である^[37]。

「犬食文化」も参照

イヌの飼育・管理

イヌの一般家庭における飼育には、庭や玄関などの屋外に犬小屋を建ててそこに住まわせる屋外飼育と、家の中に住まわせる屋内飼育とがある。屋内でもある一定のスペースにケージ(柵)を設けて、就寝時などに行動範囲を制限させる飼育も行われている。

人気の犬種

- 1990年代以来のペットブームの中、イヌは高い注目を集めてきている。人気犬種は時代によって変わるが、1990-2000年代に話題を呼んだ犬種としては、シベリアン・ハスキー、ゴールデン・レトリバー、ウェルシュ・コーギー、ブルテリア、ダルメシアン、チワワなどが挙げられる。ブームに比例してドッグウェア(犬に着せる服)も様々な多様化したブランドが進出し、これもまたブームとなっている。
- チャールズ・シュルツの漫画『ピーナッツ』の「スヌーピー(ビーグル)」、佐々木倫子の漫画『動物のお医者さん』の「チョコビ(シベリアン・ハスキー)」、ディズニー映画『101』によるダルメシアン、アイフルのテレビCMに出演した「くう〜ちゃん(チワワ)」など、テレビ・映画・漫画などの影響で、期せずしてブームとなった犬種もある。

飼育・管理

- ペットとしての名前は、2018年に行われたオスメス問わずのランキングによれば「ココ」「モモ」「マロン」の順に多い^[38]。
- 最近では、愛犬と飲食できるドッグカフェ、愛犬と運動できるドッグラン、愛犬と旅行中に泊まれるペンションやホテルなどが増えている。また、愛犬を癒すためのドッグセラピーも人気である。最近では、多くの施設でルールを細かく設定しているのにも拘らず、犬、飼い主同士のトラブルも少なくない。そのため、これらの施設を利用する前に安全上のきまりやルールを、飼い主自身で確認しておくことが大切である^[39]。
- 公園や河川敷など、囲われた所有地以外で飼い犬のリードを外して放し飼いにする者も少なくないが、たとえ短時間であろうともこれは条例違反であり、罰金刑が課せられることもあり得る。
- 千葉県市川市市議会は2009年9月11日条例改正を可決し、2010年4月から路上などの犬の糞の放置や不始末に過料2,000円を科すとした^[40]。
- 近年精神疾患を罹患する犬が増加している。その理由として、屋内飼育が増え、人間との距離が接近して攻撃行動、常同障害^[注釈 6]、分離不安などにかかりやすい環境^[41]、インターネット普及による飼い主の認知能力向上が指摘されている(武内ゆかり准教授・東京大学大学院獣医動物行動学研究室)。また、犬の大脳皮質コントロールが人間より脆弱で、気分が神経伝達物質の影響を受けやすいとされる(和田秀樹・精神科医)^[42]。

イヌに悪影響を与える食べ物



噛みつく訓練を受けた犬

イヌの健康に影響を与える食べ物については、それが良い影響なのか悪い影響なのかを問わず、科学的にすべてが解明されているわけではない。現在、健康によい、もしくは無害とされている食べ物でも、将来的に悪影響が判明したり長期的な調査によって長期間の摂取が好ましくないとされたりする可能性がある。以下に挙げる物は健康への悪影響が判明している食べ物であり、これらのものを好んで食べるイヌもいるため、飼い主が与えない、もしくは、拾い食いさせないように注意されている。

■ チョコレート

これは、チョコレート類に含まれるテオブロミンという成分によって中毒を起こすためである。体重**10kg**のイヌが約**100g**食べた場合でも発症のおそれがある。**2009**年度では、**215**件の中毒事例が報告されている^[43]。ネコも同様の理由で悪影響を受ける。

■ ネギ類(ネギ、タマネギ、ニンニク、ニラなど)

これは、ネギ類に含まれる成分(アリルプロピルジスルファイドなど)がイヌの赤血球を溶かし、貧血を起こすためである(タマネギ中毒)。ネコも同様である。

■ 鶏の骨

噛み砕いた際にササクレ状に割れるため飲み込んで消化管穿孔の原因になることがあるため、生の鶏を与える際は飼い主が注意深く観察することは大事。特に加熱されたものは更に骨が硬くなり危険。

■ 牛乳

他の哺乳類と同様に生育にしたがい、腸内のラクターゼが失われて授乳に含まれる乳糖の分解が困難になり、下痢などを発症する乳糖不耐症を指す。これは犬に限らず健康な哺乳類全般で見られる。ただし、牛乳は犬の母乳に比べて乳糖の割合が高いことには留意すべき^[注釈 7]。幼犬で発症する場合は不耐ではなく個体ごとのアレルギーを疑うべきである。

■ キシリトール

インスリンの過剰分泌による低血糖や肝障害を引き起こす。人とは異なり犬に対しては、キシリトールはインスリンを分泌させる力が強いいため、血糖を異常に低下させてしまう。血糖低下による、意識低下、脱力、昏睡、けいれん、肝障害が起こる可能性がある。

キシリトールを**0.1g/kg**以上(体重**10kg**の犬で**1g**)摂取してしまった場合には要治療であるとの報告がある。^[44]

埼玉県獣医師会では、犬にキシリトールを食べさせないように、中毒を起こした場合はすぐに獣医師の診察を受けるよう注意を呼び掛けている。^[45]

厚生労働省の資料によると**104**週間の高濃度投与で肝臓への影響が確認できるが、単回投与における毒性は極めて低いとされる。^[46]

■ アボカド

果肉や皮に毒素が含まれており、下痢や嘔吐を起こす危険性がある。種を誤食する恐れもあるので、イヌの届く場所に置かない^[47]。

■ たけのこ

結石症のリスクを高めるシュウ酸を多く含み、与えない方がいい。味付けメンマは塩分も高く、与えない方がいい^[47]。

■ ブドウ(葡萄)(生ブドウ及び干しブドウ)

腎尿細管壊死を起こす可能性がある。

ブリーダー

- さまざまな犬種ごとのイヌを繁殖させて販売する業者をイヌのブリーダーといい、各ブリーダーの犬舎を、しばしばケネル、ケネルとも呼ぶ(英語 **kennel** から)。各国で犬種の管理等を行う蓄犬団体は「ケネルクラブ」と称し、日本にも社団法人ジャパンケネルクラブがある。

イヌをめぐる社会問題

- 近年高まるペットブームの中、一部の業者によって人気品種の乱繁殖が行われている。日本ブリーダー協会は近親交配の結果、先天性障害を持つ犬が増加していると警告している。生まれながら障害を発症している犬は処分されることが多い。国はこうした障害犬の増加を受け、動物管理法を改正し悪質業者を処分できるようになった。しかし、結局のところ消費者の意識が変わらなければ障害犬を産む乱繁殖をとめることは難しい。
- イヌは愛玩動物として飼育されている数が多い分、人間による虐待、虐殺により、命を落とすものや、捨て犬として不法に遺棄されるもの、あるいは飼い主やその家族の身勝手無責任な理由によって保健所に送られるものも少なくない。例年、非常に数多くのイヌや猫たちが、全国の保健所施

設で殺処分されている（2006年度で犬**86,000**頭余）。特定の動物の遺棄や虐待は動物愛護法で処罰されることがある。

- 離島などで野生化した野犬の存在は、野猫や人為的に持ち込まれたマングースとともに、絶滅が危惧される小動物や陸地に営巢する鳥類にとって、大きな脅威となっている。鳥獣保護法においては、野犬は狂犬病の感染防止と特定鳥獣の保護の観点からハンターによる銃・わな猟での狩猟対象となっているものの、飼い犬や野良犬との厳密な区別が極めて難しい為に、極端な大規模集団となった野犬群を自治体などからの依頼で猟友会が駆除する場合を除き、積極的に野犬を狩猟対象とするハンターは殆ど居らず、対策は**可能な限り野犬を発生させない＝飼い主に最後まで責任を持って飼育させる**以外には無い。

犬の鳴き声のオノマトペ

日本語

犬の鳴き声を、現代日本では、一般的に「わんわん(ワンワン)」「きゃんきゃん(キャンキャン)」などの擬音語(オノマトペ、声喩)で表されるのが普通である。そのため、これらの語を元にして犬のことを「**ワンちゃん**」「**わんこ(ワンコ)**」「**わん公(ワン公)**」などとも俗称する。なお、日本語では擬音語が発達しており、他にも「ぐるるる(グルルル)」「うおーん(ウォーン)」「くーん(クーン)」「きゃいーん(キャイーン)」等々、犬の感情の機微を捉えようとする多様な表現が生み出されている。

歴史的には「ひよひよ」「べうべう」などを書いて「ビョウビョウ」(研究者によっては「びよびよ」と表現^[48])と発音していた期間が長く、狂言の台詞などにその名残を見て取れる。江戸時代になって「わんわん(ワンワン)」が現われ、しばらくの間は従来語と共存していた^[48]。

日本語以外

英語では bow-wow（仮名転写[以下同様]:バウワウ)、bark（バーク)、howl（ハウ)など、ロシア語では Г а в -г а в（ガフガフ)、中国語では「汪汪(ワンワン)」と鳴くとされる。

犬を主題とした作品・キャラクターなど

犬は、マスコットや、漫画など現代的フィクションのキャラクターなどとしても頻繁に登場する。

子犬を鼻先からアップで撮影した「The Dog」シリーズをはじめとして、「じゃがいぬくん」、「しばわんこ」、「お茶犬」、「アフロ犬」、「豆しば」など、イヌをモチーフとする最近のデザインやキャラクター物は、枚挙にいとまがない。

犬がテーマとなった、あるいは、犬を主要なキャラクターとする映像作品・文学作品等については、イヌを主題とする作品一覧、Category:架空の犬を参照。

歴史に名を残した犬

人間との共生が最も古い動物故に多くの犬たちが名犬とされてきた。 ノンフィクションの分野でも、忠犬ハチ公や南極物語などのように、実在した犬にまつわるエピソードや芸術作品などが数多く存在。（以下の犬たち以外にも名を残したのも多くいる。）

- **50年頃?**(垂仁天皇**87**年) 足往(あゆき) - 名前が記録に残る日本最古の犬。むじなを殺して出て来た勾玉が献上された。(日本書紀・垂仁天皇の条)
- **587年** 名前不明(白犬)- 記録に残る日本最古の忠犬(日本書紀・崇峻天皇の条)。物部守屋の家来・捕鳥部 万(とりべ の よろず)の飼い犬。朝敵として晒される主人の遺骸を餓死するまで護り、朝廷に自分と主人を墓に葬らせた。
- **1700年代**
 - **1781年** 名前不明(狆) - 酒井忠以の愛犬。光格天皇より六位の位を下賜された。
- **1880年代**
 - **1889年** ツン(薩摩犬) - 西郷隆盛のウサギ狩時の愛犬である雌犬。上野恩賜公園に立てられた銅像にその銅像が寄り添って立てられた(製作者は後藤貞行、モデルは仁礼景範海軍中将の飼い犬である雄犬)。
 - **1895年** オウニー(雑種) - **1888**年に米国のニューヨーク州の郵便局のマスコットとなり、郵政長官から旅行許可証を貰い、船に乗って世界一周をした。
- **1900年代**
 - **1900年** ニッパー(フォックス・テリア) - 円盤式蓄音器の発明者エミール・ベルリナーが感動した以前の飼い主の声に耳を傾ける肖像画を商標登録し、現在でも日本ビクターなどで使われている(His Master's Voice, HMV の商号はこれによる)。

詳細は「ニッパー (犬)」を参照
 - **1902年** 名前不明 - ロシアの生理学者イワン・パブロフ博士の飼い犬で、条件反射の実験に使われ、以降、「パブロフの犬」といえば条件反射のことを指すようになる。
 - **1923年** ボビー(コリー種) - 米国インディアナ州で飼い主とはぐれ、6か月でおよそ**4000**kmを歩き、離れた飼い主の住むオレゴン州まで戻っ

てきた。

■ 1930年代

- **1934年4月** 忠犬ハチ公(秋田犬) - 主人(東京帝国大学農学部教授の上野英三郎)の帰りを渋谷駅においてその死後も待ち続ける姿が話題となり、同駅前に銅像が立てられた。
- **1939年** ブルーイ(オーストラリアン・キャトル・ドッグ) - ギネス公認の世界最長寿記録の犬。老衰により**29歳**で死亡(**1910年6月7日** - **1939年11月14日**)。

■ 1940年代

- ブロンディ(ジャーマン・シェパード・ドッグ) - ナチスドイツの総統ヒトラーの愛犬。**1945年**ベルリンの防空壕で主人と運命をともにした。
- チップス(雑種) - 第二次世界大戦中数々の勇敢な行為により、アメリカ陸軍から二つの勲章を授与された。

■ 1950年代

- **1957年11月3日** クドリヤフカ(ライカ) - 旧ソ連が宇宙に打ち上げたスプートニク2号に搭乗した。
- **1958年** タロ、ジロ(樺太犬) - 南極越冬隊の犬ぞり用に南極に連れて行かれ、かの地で生き延びた。当時使われ、現在船の科学館に係留展示されている南極観測船「宗谷」、また東京タワーに銅像がある。

■ 1980年代

- サーブ(ジャーマン・シェパード・ドッグ・盲導犬) - 飼い主をかばい足に怪我を負った事故をきっかけに、自賠責保険の支払いが盲導犬に対しても行われるよう法改正が行われた。

■ 2000年代

- **2008年** ベラ(シープドッグ系雑種) - ギネス非公認の世界最高齢記録保持犬。**3歳**の時に保護されたが、正式な出生証明書が無かった為、ギネス記録として公認されず。**2008年**、老衰により**29歳**で死亡。
- **2009年** シャネル(ワイアーヘアード・ミニチュア・ダックスフント) - ギネス公認の世界最高齢記録を保持していた犬。生後**6**か月の時、収容施設から保護された。**2008年8月28日**、老衰により**21歳**で死亡。
- **2011年** プースケ - ギネス公認の世界最高齢記録を保持していた日本の犬。**2011年12月5日**、老衰により**26歳**で死亡。世界歴代記録としては第**9**位。

名前にイヌを持つ生物

生物の名、特に植物の名で、イヌが付くものも多い。イヌの特徴などに似ていることによるものもあるが、多くの場合、イヌが付かないものに比べて、より有用性が低かったり、使えなかったりすることを意味する(派生語も参照のこと)。

- イヌの特徴からの命名には、イヌノフグリ、イヌノハナヒゲ、イヌノヒゲなどがある。
- より使えないことによる例としては、イヌマキ、イヌビワ、イヌムギ、イヌガラシ、イヌツゲ、等。

犬の登場する諺・故事成語

五十音順に並べる。

- | | |
|------------------------|------------------------------------|
| ■ 赤犬が狐追う | ■ 鶏鳴狗盗 |
| ■ 一犬影に吠ゆれば万犬声に吠ゆ | ■ 桀の犬堯に吠ゆ |
| ■ 一犬虚に吠ゆれば万犬実を伝う | ■ 桀犬吠堯 |
| ■ 一犬吠形百犬吠聲 - 王符『潜夫論』賢難 | ■ 犬猿の仲/犬と猿/犬と猫 |
| ■ 犬一代に狸一匹 | ■ 犬牙相制す |
| ■ 犬が西向きゃ尾は東 | ■ 犬馬の心 |
| ■ 犬が星見る | ■ 犬馬の年/犬馬の齢 |
| ■ 犬腹(いぬっぱら) | ■ 犬馬の養い |
| ■ 犬に肴の番 | ■ 犬馬の労を取る |
| ■ 犬になっても大家の犬 | ■ 犬羊の質 |
| ■ 犬になるなら大所の犬になれ | ■ 狡兎死して走狗烹(に)らる - 司馬遷『史記』「越王句踐 世家」 |
| ■ 犬にも食わせず柵にも置かず | ■ 狡兎死 走狗烹 |

- 犬に論語/犬に念仏猫に経
- 犬の川端歩き(犬川)/犬の子の徒歩き
- 犬の糞で敵を討つ
- 犬の遠吠え/負け犬の遠吠え
- 犬の蚤の噛み当て
- 犬は三日の恩を三年忘れず
- 犬骨折って鷹の餌食/犬骨折って鷹に捕らる
- 犬も歩けば棒に当たる
- 犬も頼めば糞食わず
- 犬も朋輩、鷹も朋輩
- 犬を喜ばせる
- 飢えた犬は棒を恐れず
- 兎を見て犬を放つ
- 内は犬の皮、外は虎の皮
- 粵犬(えっけん)雪に吠ゆ
 - 粵犬吠雪/越犬吠雪
- 大犬は子犬を責め、子犬は糞を責める
- 尾を振る犬は打てず/尾を振る犬は叩かれず
- 飼い犬に手を噛まれる
- 垣堅くして犬入らず
- 画虎類狗/画虎成狗/描虎類狗
- 食いつく犬は吠えつかぬ
- 狗緇(くし)衣に吠ゆ
 - 狗吠緇衣
- 狗頭角を生ず
 - 狗頭生角
- 狗尾続貂
- 暗がりの犬の糞
- 鶏犬の声相聞こゆ
- 鶏犬も寧(やすら)かならず
 - 鶏犬不寧
- 狡兎走狗
- 狡兎死して良狗烹(に)らる。- 司馬遷『史記』「(韓信)淮陰侯 列伝」→韓信、范蠡
 - 狡兎死 良狗烹
 - 狡兎良狗
- 米食った犬が叩かれず、糠食った犬が叩かれる/策(ざる)舐めた犬が科かぶる
- 蜀犬(しょっけん)日に吠ゆ
 - 蜀犬吠日
- 棄犬(すていぬ)に握り飯
- 跖狗吠堯
- 喪家の狗
- 鼠窃狗盜
- 泥車瓦狗
- 陶犬瓦鶏
- 唐犬額
- 夏の風邪は犬もひかぬ
- 夏の蕎麦は犬も食わぬ
- 白衣蒼狗/蒼狗白衣
- 飛鷹走狗
- 夫婦喧嘩は犬も食わぬ
- 吠える犬は噛まぬ
- 煩惱の犬追えども去らず
- 邑犬群吠
- 鷹犬之才
- 羊頭狗肉/羊頭を懸げて狗肉を売る
- 楊布之犬
- 狼心狗肺
- 驢鳴犬吠/驢鳴狗吠
- 淮南之犬

その他イヌについて

 この節に雑多な内容が羅列されています。事項を箇条書きで列挙しただけの節は、本文として組み入れるか、または整理・除去する必要があります。(2013年2月)

- 11月1日が犬の日として、社団法人ペットフード協会によって定められた。
- 行動学からの詳細な議論については、(データとしては古くなってしまうが)コンラート・ローレンツの『人イヌに会う』(至文堂)を参照するとよい。
- 犬はしっぽを右に振って喜びを、左へ振って警戒を表現するという説がある^[49]。
- 作家太宰治は極度の犬嫌いだったらしく、犬に対する心情(恐怖)を短編「畜犬談」において痛ましくもユーモラスに記している。
- 犬は走る人などを見ると追いかける習性がある。犬が追いかけてきたとき、走って逃げるのは逆効果である。また、犬は階段の上り下りが苦手なので、近くに階段があれば、階段に逃げ込むとよい。



犬の親子

注釈

1. ^ 既知の有力説の一つを記載。異説多数あり。
2. ^ 代表的生物につき、大幅な省略をあえて行わず分類区分を表記する。もともと、これでもかなりの省略はしており、全容ではないことを書き添えておく。
3. ^ 分類学上、未整理の分類群(タクソン)。以下同様。
4. ^ 顎口上綱の下位で相克関係にある。
5. ^ この行為は恐怖を感じた時にも行なう場合がある。
6. ^ 同じ行動を過度に繰り返す症状。自分の尻尾を追うようにぐるぐる回るなど。
7. ^ 母乳中の乳糖の割合は、イヌで**3.1%**、ウシで**4.7%**、人間ではさらに高く**6.1 - 6.8%**も含んでいる。

出典

1. ^ Macdonald, David; Claudio Sillero-Zubiri (2004). *The Biology and Conservation of Wild Canids*. Oxford: Oxford University Press. pp. 45-46. ISBN 0198515561.
2. ^ Axelsson E, Ratnakumar A, Arendt ML, Maqbool K, Webster MT, Perloski M, Liberg O, Arnemo JM, Hedhammar A, Lindblad-Toh K (2013). "The genomic signature of dog domestication reveals adaptation to a starch-rich diet". *Nature* **495** (7441): 360-4. doi:10.1038/nature11837 (<https://doi.org/10.1038%2Fnature11837>).
3. ^ バーニーズの水の飲み方の秘密をHX-A100が捉えた (<https://www.youtube.com/watch?v=252DkauNvdK>). (2013年6月8日) 2019年5月6日閲覧。
4. ^ "真相が明らかに!犬はどうやって水を飲む? (<https://archive.is/2FYcI>)". *dogactually*. 2016年4月16日時点のオリジナル (<http://www.dogactually.net/blog/2011/06/post-91.html>)よりアーカイブ。2019年5月6日閲覧。
5. ^ "水を飲む「犬の舌」を本気で観察 (https://videotopics.yahoo.co.jp/videolist/official/animal_pet/p3220280be7be0c9873e1ab2765cdb536)". *Yahoo!映像トピックス*. 2019年5月6日閲覧。
6. ^ おさかな雑学研究会『頭がよくなるおさかな雑学大事典』幻冬舎〈幻冬舎文庫〉、2002年、123頁。ISBN 4344402944。
7. ^ "パンティングとは何か。犬の異常なパンティングは肺や心臓の病気かも (<https://petr.jp/inu-panting-1521>)". ペットの情報サイト「ベッター」. 2016年9月13日閲覧。
8. ^ *a b c* "犬の交配に関する基本と注意〜メス犬の発情周期からオス犬探しまで (<https://www.koinuno-heya.com/hansyoku/kouhai.html>)". 子犬のへや. 2019年5月5日閲覧。
9. ^ "PKJ規約 繁殖および犬の譲渡に関する倫理要綱 繁殖のための諸手続き - 交配の手続き - 5.「交配写真」 (<http://www.krysarik.net/kiyaku.html>)". ブラシユスキー・クリサジーク・クラブ・オブ・ジャパン. 2019年5月5日閲覧。
10. ^ "乳母になれる犬の話 (http://so-amc.com/column/2002/2002_11.html)". 南大阪動物医療センター. 2019年5月5日閲覧。
11. ^ "虎の赤ちゃんを育てるお母さんシェパード!母性は種を超える (https://www.excite.co.jp/news/article/Crankin_2162105/)". エキサイトニュース (2012年11月26日). 2019年5月5日閲覧。
12. ^ "杭州 ホワイトライオンを育てる「イヌの乳母」" (<http://j.people.com.cn/94638/94659/8611368.html>). 人民日報. (2014年4月28日)
13. ^ "写メ・ハナキン...、「おじさん言葉」受け流し術 (<https://toyokeizai.net/articles/-/194758?page=3>)". 東洋経済オンライン. 2019年9月16日閲覧。
14. ^ "- Explore Records - Guinness World Records (<http://web.archive.org/web/20140408091329/http://www.guinnessworldrecords.com/records-1000/oldest-dog-living/>)". 2014年4月8日時点のオリジナル (<http://www.guinnessworldrecords.com/records-1000/oldest-dog-living/>)よりアーカイブ。2011年10月7日閲覧。
15. ^ 世界一の長寿犬「ぶースケ」、26歳9カ月大往生 （写真=共同）(https://www.nikkei.com/article/DGXNSSXKC0173_W1A201C1000000/) - 日本経済新聞、2011年12月6日。
16. ^ 犬の「ごめんなさい」の姿勢は飼い主の態度に反応しているだけ? (英研究) (<https://woofoo.jp/akinaga/dogs-dont-feel-guilt/>) 2015年10月22日 the WOOF
17. ^ 「犬は怖がっている人間にかみつく」は本当か (<http://mainichi.jp/premier/health/articles/20180227/med/00m/010/005000c>) 2018年2月28日 毎日新聞「医療プレミア」
18. ^ "Le Rôle des Chiens dans l'Histoire (<https://web.archive.org/web/20080613160823/http://www.nord-dressage.fr/chien/index.php?page=roles>)". *nord-dressag*. 2008年6月13日時点のオリジナル (<http://www.nord-dressage.fr/chien/index.php?page=roles>)よりアーカイブ。2019年5月5日閲覧。
19. ^ ブライアン・フェイガン『人類と家畜の世界史』東郷えりか訳 河出書房新社 2016年、ISBN 9784309253398 pp.309-310.

20. ^ *a b* ハーツォグ 2011, p. 67.
21. ^ ハーツォグ 2011, p. 238.
22. ^ 【世界発2017】イラン、犬はタブー？友達？イスラム教では忌避するが...ペットで人気 (<http://www.asahi.com/articles/DA3S13110312.html>) 『朝日新聞』朝刊2017年8月31日
23. ^ *a b* 松井 2005, p. 184.
24. ^ 西本豊弘「イヌと日本人」西本豊弘編『人と動物の日本史1 動物の考古学』吉川弘文館、2008年
25. ^ 袁靖「哺乳綱」、麻生町教育委員会編『於下貝塚 発掘調査報告書』1992年、154～183頁。
26. ^ 袁靖・加藤晋平「茨城県於下貝塚出土の小型動物の切痕(英文)」『千葉県立中央博物館研究報告 人文科学』2巻2号、1993年。
27. ^ *a b* 松井 2005, p. 186.
28. ^ 松井 2005, p. 187.
29. ^ “勝山物語(畑時能物語) (<http://www.oidenense.net/stories/hata/>)”。*おいでねんせカツチャマ*. 2019年5月5日閲覧。
30. ^ 関根久夫『埼玉の日本一風土記: 埼玉が誇る自然・歴史・文化を訪ねる読み物ガイド』幹書房、2010年。ISBN 9784902615630。
31. ^ 谷口 2012, p. 67.
32. ^ 谷口 2012, p. 80.
33. ^ 大木(1994)、p.250
34. ^ ハーツォグ 2011, p. 235.
35. ^ *a b c* ハーツォグ 2011, p. 236.
36. ^ ハーツォグ 2011, pp. 237-238.
37. ^ “犬肉の食用禁止を目的に連盟が発足 (<http://blog.taiwannews.jp/?p=50745>)”。*台湾新聞*. 株式会社 臺灣新聞社 (2019年4月19日). 2019年5月30日閲覧。
38. ^ “犬の名前ランキング2018 (https://www.anicom-sompo.co.jp/special/name_dog/)”。アニコム損害保険株式会社. 2019年5月5日閲覧。
39. ^ “ドッグランでトラブルに巻き込まれたらどうすればいい？対処法まとめ | わんころ倶楽部 (<https://wancoro.club/dog-run-knowledge/>)” (日本語). *wancoro.club*. 2018年11月2日閲覧。
40. ^ 読売新聞2009年9月12日13S版31面
41. ^ 読売新聞 2016年11月22日 15面。
42. ^ AERA2012年12月3日号
43. ^ 朝日新聞2012年2月14日
44. ^ Eric K. Dunayerら, 2006年12月0
45. ^ “犬のキシリトール中毒に注意!! (<https://archive.is/JnDG1>)”。社団法人 埼玉県獣医師会. 2013年5月3日時点のオリジナル (http://www.saitama-vma.org/sick_k02.html)よりアーカイブ。2019年5月5日閲覧。
46. ^ “厚生労働省行政情報 食品衛生調査会関係資料 食品添加物の指定、使用基準の改正に関する食品衛生調査会、毒性部会及び添加物部会 合同部会報告について 別添1 キシリトールの指定について (<http://web.archive.org/web/20150924012104/http://www.ffcr.or.jp/zaidan/MHWinfo.nsf/0/a882af3c2daa31ba49256609001da2aa?OpenDocument>)”。日本食品化学研究振興財団. 2015年9月24日時点のオリジナル (<http://www.ffcr.or.jp/zaidan/MHWinfo.nsf/0/a882af3c2daa31ba49256609001da2aa?OpenDocument>)よりアーカイブ。2019年5月5日閲覧。
47. ^ *a b* 「いぬのきもち」2012年5月号、ベネッセ。
48. ^ *a b* 山口 2002, p. 不明.
49. ^ “うれしいとき、犬のしっぽ右に (http://www.sankei.co.jp/enak/2007/may/kiji/01life_dog.html)”。*産経新聞 ENAK*. 産経デジタル. 2019年5月5日閲覧。

参考文献

- 谷口研語『犬の日本史―人間とともに歩んだ一万年の物語―』吉川弘文館、2012年。ISBN 9784642063821。
- ハロルド・ハーツォグ『ぼくらはそれでも肉を食う 人と動物の奇妙な関係』山形浩生, 守岡桜, 森本正史訳、柏書房、2011年。ISBN 9784760139620。
- 松井章「狩猟と家畜」『列島の古代史　ひとものこと』2、上原真人・白石太一郎・吉川真司・吉村武彦、岩波書店、2005年。ISBN 4000280627。
- 山口仲美『犬は「びよ」と鳴いていた―日本語は擬音語・擬態語が面白い―』光文社〈光文社文庫〉、2002年8月。ISBN 4334031560。

関連項目

犬の飼育

- 犬の品種一覧
- ドッグライフカウンセラー
- トリマー
- ドッグショー
- 犬の十戒
- 犬学
- カーミング・シグナル(犬の気分を表す行動)

犬の訓練

- 戦闘犬(攻撃犬とも称される)
- 軍犬

病気・医療

- ジステンパー
- 犬の白内障

学問

- 犬儒派

信仰

- 狛犬
- 犬神
- 犬神人(いぬじにん)

派生語

- 犬吠埼
- 犬かき
- おおいぬ座、こいぬ座、りょうけん座
- ペーパーわんこ(ペーパークラフト)

- 犬走り
- 犬矢来
- ドッグファイト

食文化

- 犬焼酎
- 牡丹市場

「<https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=イヌ&oldid=75472826>」から取得

最終更新 2019年12月23日 (月) 21:06（日時は個人設定で未設定ならばUTC）。

テキストはクリエイティブ・コモンズ 表示-継承ライセンスの下で利用可能です。追加の条件が適用される場合があります。詳細は利用規約を参照してください。